

戦争のなかの神戸市立二葉尋常小学校・二葉国民学校

——『学校日誌』を素材にして——（下）

Consideration of Kobe Municipal Futaba Jinjo Elementary School and Futaba National School during the War (Final Part): Using the Prewar “School Diary” as a Material

水 本 浩 典
MIZUMOTO Hironori

はじめに

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 二葉小学校関係学校日誌について 2. 束の間の平和
- 1929（昭和4）年～1931（昭和6）年 - 3. 兄弟国・満州国への連帯感
- 1932（昭和7）年から1935（昭和10）年 - | <ol style="list-style-type: none"> 4. 戦争を実感する児童たち
- 遺骨出迎・慰霊祭 -（以上、本誌42号掲載） 5. 忍び寄る戦争 6. 神戸空襲と学校 7. 敗戦後の二葉国民学校
おわりに
- 戦後の二葉小学校『学校日誌』から - |
|--|---|

5. 忍び寄る戦争

5.1 国際交流

1933（昭和8）年は、日本が西欧列強のなかで孤立を深めていく年になる。設立当初から常任理事国として西欧列強に伍して国際社会で存在意義を認められつつあった日本は、日本が建国に深く関わった満州国をめぐる対立を深めていく。2月24日の国際連盟総会で、中国の統治権を承認し、日本軍の撤退を求める報告案に対して、参加国の圧倒的多数が賛成を投じ、反対票を投じた松岡洋右ほかの日本代表団は議場から退場した。そして、3月27日に国際連盟脱退に関する詔書を発表して連盟に脱退を通告した³⁵⁾。

二葉尋常小学校『学校日誌』には、2カ月後に開催された市民記念講演会において、国際連盟脱退の詔書が発布されたことに言及している。

35) この間の経緯については、白井勝美「国際連盟脱退経緯」九州大学国史学研究室編『近世近代史論集』吉川弘文館、1990に詳しい。

5月27日 一、午後七時半ヨリ市民記念講演会行ハル

1. 開会之辞 市社会教育課平間氏
2. 国際連盟脱退ニ関する詔書 同右
3. (以下略)

大きく新聞でも報じられた国際連盟脱退のニュースについて、二葉尋常小学校『学校日誌』は、市民向けに開催された「市民記念講演会」で神戸市の職員が講演というかたちで周知させようと図っていたことがわかる。

翌年、昭和9年3月1日の二葉尋常小学校『学校日誌』には、「満洲国帝政実施日」の記載がある。この国際連盟脱退という日本が採った行動は、その後に日本が西欧列強と協調する姿勢から、一転して孤立を深めるきっかけになったとされている。現在の高校教科書でも、この通説に従って次のように記述している。

1936（昭和11）年には、日本が第2次ロンドン海軍軍縮会議を脱退してロンドン条約が失効し、1934（昭和9）年に破棄を通告していたワシントン海軍軍縮条約も続いて失効し、日本は国際的に孤立するに至った。³⁶⁾

しかし、すべて日本中が西欧列強との関係を遮断したわけではなかった。二葉尋常小学校『学校日誌』、1934（昭和9）年に次のような記載がある。

- ・一、少年赤十字団通信交換、米国フロリダ州ウエストリバーサイドスクールヨリ紙挟一葉来簡ニツキ児童へ披露ス、
(9月7日条)
- ・一、少年赤十字団トシテ クリスマス贈物人形七点ヲ海外少年赤十字団へ発送ス、
(10月31日条)

「少年赤十字団」が「通信交換」というかたちでアメリカの学校と交流をしており、そのうちの「一葉」の葉書が二葉尋常小学校にもたらされ、児童朝会の場だと推定される機会に披露されている。

1922（大正11）年に滋賀県伊香郡で最初に結成された少年赤十字団は、翌年には東京・埼玉・大阪・兵庫などの府県でも設立されていく。当時の少年赤十字団は、学校単位で組織され、校長が団長になり教師が指導者となって活動をしていた。1923年になると日本の少年赤十字団は海外との通信を始める。榊井孝³⁷⁾によると、少年赤十字国際通信は、1924（大正13）年から1942（昭和

36) 笹山春生・佐藤信・五味文彦・高埜利彦他編『詳説日本史 改訂版』山川出版社、2018、p.347。

37) 榊井孝「大正期・昭和初期の国際理解教育－1920年代～30年代の「少年赤十字」の国際交流活動－」『戦争と平和 '03』（大阪国際平和研究所 紀要 Vol.12）、2003。また、日本少年赤十字団の活動については、ベレジコワ タチアナ「1920～30年代における日本少年赤十字の『国際通信交換』」日本語日本文化教育研究会編『問谷論集』14号、2020.3でも分析が行われている。

17) 年までに毎年継続され、発信数は合計 14,575 通、受信数は合計 14,524 通にのぼっている。上述の 1934 (昭和 9) 年では、935 通を受信している。そのうちの 1 通が二葉尋常小学校にもたらされたことになる。

それに対して、二葉尋常小学校では、「少年赤十字団」名義で「クリスマス贈物人形七点」を海外の少年赤十字団に発送している。

人形の贈答については、つとに「青い目の人形」のアメリカと日本の相互贈答が有名である。1920 年代前半、日米間の対立を和らげようと考えたアメリカ人シドニー・ギューリックが提唱し子どもの世代からの国際交流の具体的な活動として、1927 (昭和 2) 年にアメリカから 1 万 2 千体以上の人形が日本に送られた。この人形は全国の小学校などに配布され歓迎される。それに対して後援者であった渋沢栄一の呼びかけで、「答礼人形」58 体がアメリカに送られ、全米の児童たちの歓迎をうけ各地の博物館や美術館に収められた³⁸⁾。

しかし、上記の人形による日米間の交流は、二葉尋常小学校が開設される前の出来事である。ベレジコワ・タチアナは、日本少年赤十字団による国際人形交流について考察した論考を公表しているが、このなかで、山本孫義の『青少年赤十字教育の原理と実践』(教育出版社営業部、1949) を引用し、「従来通信交換の外に日米両国青少年赤十字の間には、毎年、人形、手工芸品、玩具等を詰めた小箱が二千箱内外正月クリスマス贈物として贈答されていた」と書いている³⁹⁾。このような日本少年赤十字団に集められた人形 7 体が「海外少年赤十字団」に向けて発送されたことを、二葉尋常小学校『学校日誌』は記録してくれたことになる。

1935 (昭和 10) 年度の『学校日誌』にも、二葉尋常小学校と赤十字少年団を通じた交流が続いていたことを、以下の記載から知ることができる。

- ・一、赤十字少年団通信 (海外通信) 米国リバーサイドスクール絵葉書一枚送付シ来ル。
(4 月 13 日条)
- ・一、米国ウエストリバーサイドスクールヨリ通信文書到着ス、朝会ニ児童一同へ朗読シテ聴カシム、
(6 月 19 日条)

これに続いて、以下のような記述が続く。

- 一、あめりか人形使節歓迎ノ為メ、六年女生五名佐藤訓導付添、寺田訓導 校長二代ッテ、外

38) 武田英子『人形たちの懸け橋-日米親善人形たちの二十世紀-』小学館 (小学館文庫)、1998。是澤博昭『青い目の人形と近代日本-渋沢栄一と L. ギューリックの夢の行方-』世織書房、2010。などに詳しい。また、この人形の贈答をテーマした授業実践を記録した、教科授業づくり部会編・森脇健夫他著『戦争を考える授業「青い目の人形物語〈たのしい歴史の授業づくり〉』学事出版株式会社、1990 がある。また、本稿と同様に学校日誌の記載に着目した論文に、北林勝士「学校日誌から見た青い目の人形と特色ある学校」『飯田市美術館博物研究紀要』14 号、2004. 4 がある。しかし、日本少年赤十字団とアメリカ青少年赤十字団との通信交流については言及がない。

39) ベレジコワ・タチアナ「日本少年赤十字の国際人形交流 (一)-国際通信交換から国際人形交流まで-」『人形玩具研究 かたち・あそび』28 号、2017、p.162。

人劇場（東遊園地）へ午後零時ヨリ出席ス、

（6月22日条）

この「あめりか人形使節」とは、1935（昭和10）年当時のニューヨーク市長が派遣した等身大の人形親善使節のことである。ミスター&ミセス・アメリカと呼ばれた人形親善使節（図5参照）は、日本郵船の浅間丸の一等特別船室で横浜港に到着後、東京の帝国ホテルに宿泊し皇居などを見物した後、飛行機で名古屋に移動、特急列車で京都・大阪・神戸・別府・阿蘇山・熊本・雲仙・長崎を巡り各地で盛大な歓迎を受けた⁴⁰⁾。このミスター&ミセス・アメリカと名付けられた等身大の人形親善使節が神戸に立ち寄った際、二葉尋常小学校の六年女子児童5名が神戸市中央区の東遊園地で開催された歓迎会に列席したことを記録した記事である。



図5 「Mr. and Mrs. America Safely Arrive In Japan」
『THE TRAVEL BULLETIN』1935年8月号に掲載されたミスター&ミセス人形親善使節
注：京都大学附属図書館所蔵当該雑誌 p.224 より転載

このような一連の記事から考えると、二葉尋常小学校の教員も児童もアメリカの小学校や児童との間に親近感こそあれ、反米感情を抱かせる要素は存在しないように思える。

二葉尋常小学校『学校日誌』は、1936（昭和11）年度から1938（昭和13）年度の3冊は欠失している。尋常小学校期最後の『学校日誌』である1939（昭和14）年度の記述を見ても上記のような海外との交流に関する記事はない。

1935（昭和10）年に交付された青年学校⁴¹⁾令によって設置された二葉青年学校⁴²⁾の『学校日誌』

40) 「Mr. and Mrs. America Safely Arrive In Japan」『THE TRAVEL BULLETIN』1935年8月号所収。

41) 尋常小学校を卒業し実社会で働く者を対象にした社会教育機関である青年学校に関しては、国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第8巻 社会教育』国立教育研究所、1974。米田俊彦『教育審議会の研究 青年学校改革』（野間教育研究所紀要 39集）、野間教育研究所、1995に詳しい。勤労青年を対象にした社会教育機関であるため、授業は夜間に実施された。

が唯一 1938（昭和 13）年度の 1 冊が残存している。尋常小学校とは性格を異にする青年学校ではあるが、興味深い記述がある。

- ・訪独大日本青少年使節団本日午後三時第四突堤より清国丸にて出帆す、一行の中本校下駒ヶ林少年団員松本 君あり、
矢野助教諭引率生徒代表古川以下三名（小学校児童四名同行）校旗をモツテ見送ル
松本君及同君の御両親ニ祝辞ヲノブ (5月27日条)
- ・十一月四日 金 ヒットラーユーゲント歓迎打合ノ為 生徒三名午後七時二宮青年校へ行く (11月3日条)
- ・ヒットラーユーゲント及訪独日本青少年使節歓迎等ニ関シ (11月7日)
- ・夕礼時 矢野助教諭ヨリ
 1. 本日午前湊川神社ニ於ケルヒットラーユーゲント交歓会ニ生徒代表三名ヲオクリタル事 (11月10日)

国際連盟を脱退した日本はナチス・ドイツに接近していき、1936（昭和 11）年には日独防共協定を締結している。これは、後に日・独・伊三国による所謂日独伊三国軍事同盟へと発展していくことになる。こうした国際情勢のなか、ヒトラー・ユーゲントとの相互訪問が 1938 年と 1940 年の 2 回実施される。1938 年の第 1 回の相互訪問では、日本側が帝国少年団協会代表や大日本連合青年団代表、大日本少年団連盟代表など計 30 名が訪独し、ドイツ側も 30 名が来日した。

日本側使節団は、5 月 27 日神戸港を出港し、ヨーロッパ各地をまわり、11 月 12 日神戸港に帰ってきた。一方、ヒトラー・ユーゲント代表団は、7 月 12 日にブレーメンを発ち、8 月 16 日横浜港に上陸、日本各地を訪問し、12 月 12 日に神戸港から離日している⁴³⁾。

二葉青年学校昭和 13 年度『学校日誌』は、この日独の青少年が相互に交流した行事の一部を記録していることになる。しかし、この日独青少年相互訪問という日本をあげての一大行事に二葉尋常小学校がどのように関わったのかは、『学校日誌』が欠失しているため、よくわからない。わずかに日本訪問団が神戸港を出港する見送りに、「小学校児童四名同行」したという記載があることからして、二葉尋常小学校においても何らかの歓送迎に関する行事が行われたと推測される。

以降、二葉尋常小学校及び二葉尋常小学校を改組して誕生する二葉国民学校の『学校日誌』からは、国際連携や国際交流の記載はまったくみられない。

42) 二葉青年学校は、創設当時、松山久太郎校長のもと、上山教諭、矢野、井上、栗山の 3 名の助教諭、有賀、川内、菅生、谷山の 4 名の指導員、計 9 名が職員であった。前掲 8) にも引用した『二葉教育十年史』二葉尋常小学校、1939、p.331。

43) この日独青少年相互訪問については、中道寿一「ヒトラー・ユーゲントがやってきたー日独青少年団交歓事業の意味についてー」『ヒトラー・ユーゲントがやってきた』第 3 章、南窓社、1991 に詳しい。また、大串隆吉「戦時体制下日本青年団の国際連携ーヒトラー・ユーゲントと朝鮮連合青年団の間ー(1)」『人文学報（東京都立大学人文学部）』270 号、1996. 3 や佐藤卓己「ヒトラー・ユーゲントの来日イベント」津金澤聰廣・有山輝雄編著『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社、1998 所収でも論じている。

5.2 戦時色に染まっていく学校

二葉尋常小学校『学校日誌』の記載に、軍隊が出てくるのは、1935（昭和10）年度の『学校日誌』からである。

- 一、本日久留米戦車隊 大小戦車二十台 兵員一三〇名 林田区内宿営、大橋町七丁目空地ニ
停車 (7月9日条)

次に記載が確認できるのは、二葉国民学校期の『学校日誌』である。1941（昭和16）年夏、二葉国民学校は軍隊の宿営場所として使用される。

- ・一、軍隊宿泊通知アリ（小林氏ヨリ） (8月3日条)
- ・一、軍隊宿泊ニツキ打合せヲ行フ、(校長、首席、学年主任、女先生総代) (8月4日条)
- ・一、五、六年児童ヲ招集シ講堂、二階運動場側十一教室ヲ軍隊宿泊室トシテ準備ス、
一、午後九時半陸軍〇兵〇〇〇名到着 職員多数、町会役員、軍人会、婦人会、青年団等多
数出迎ヲナス (8月5日条)
- ・一、軍隊宿泊中
一、町会役員、国防婦人会、在郷軍人会等多数来校、種々接待ヲナス (8月6日条)
- ・一、午前八時ヨリ軍人ト児童ノ小体育会ヲ開ク、午前十時終了 (8月7日条)
- ・一、宿泊中ノ軍隊 午前六時三十分出発ス、 (8月8日条)
- ・一、本日軍隊宿泊ニツキ駒ヶ林町会員多数来校諸準備ヲナス、
一、軍隊宿泊 綱盛、難波、菅生、涌井、藤井 出勤勤務 (8月9日条)
- ・一、軍隊早朝出発ス (8月10日条)
- ・一、児童出席日
一、教室片付（第一時） 軍隊宿泊ノ為 種々準備セシ講堂、教室ノ跡片付ヲナス
(8月22日条)

昭和10年に林田区で宿営した部隊は戦車部隊であり、地域の空地に1泊した。二葉尋常小学校とは直接関係がない事項であるが、学校を含めて地域にとっては戦車部隊の宿営は珍しい出来事であったため、殊更に『学校日誌』に書き留めたようである。

一方、昭和16年夏に実施された陸軍部隊による学校での宿営については、詳細に記録している。この年12月8日には、「本日午前十一時米、英、両国ニ対シテ宣戦ノ詔書煥発サル」と書いて、所謂太平洋戦争が勃発する。それまでの日中間の大規模な軍事紛争（宣戦布告はなされていない）とは違い、天皇が宣戦詔書を発して米英と「戦争」を始めることになる。二葉国民学校『学校日誌』が記録する学校での軍隊宿営は、太平洋戦争勃発前の慌ただしい世相を感じさせる記録である。この時の学校内軍隊宿営に対して、町会をはじめ国防婦人会や在郷軍人会、青年団など地域の諸団体がこぞって歓待し、教職員も連日対応に追われていることは当然であったろう。

注目したいのは、「軍人ト児童ノ小体育会ヲ開ク」という記載である。単に学校施設を宿営施設として使用するだけでなく、宿泊した兵隊たちが国民学校児童と「小体育会」を持った。国民学校児童にとっては、このような「小体育会」で接した軍人たちに一層の親近感と連帯感を持ったのではなかろうか。それが、いかに軍部上層部による意図的な対応であったとしても、国民学校に宿営する兵隊たちを接待し、国民学校児童の「小体育会」をともにした興奮は、軍隊と国民との紐帯をより強固にする効果をあげたと思われる。

このような国民学校と軍隊との強固な紐帯感を、1938（昭和13）年度の学芸会のなかに見出すことができる。創立十周年記念学芸会は、昭和13年12月8日・9日の2日間行われた。その内容を『二葉教育十年史』に掲載する「第十回学芸会プログラム」から抜粋する⁴⁴⁾。

唱歌	入営を送る	五 男
唱歌	兵隊ごっこ	二 男
朗読	空爆の華 慰問袋	四 年
唱歌	兵隊さんの汽車	一 女
唱歌	傷痕の勇士	四 男
唱歌	兵隊さんありがたう	一 男
舞踊	新兵さんのお星	二 女

2日間の合計22「演技」のうち、「兵隊」をテーマにした「演技」が7つもある。「演技」の演目は教員が選定したとしても、一年生から五年生まで満遍なく「兵隊」をテーマにした唱歌・朗読・舞踊を演じている。学校行事まで戦時色に染まっている状況を垣間見ることができる。

二葉尋常小学校、二葉国民学校の『学校日誌』には、児童が鑑賞した映画についての記載が散見できる。鑑賞した映画の題名などがすべて記載されているわけではないが、1930（昭和5）年度『学校日誌』以降の映画観賞記載のなかで、学校児童が見た教育的に有意義だと思って選定したような映画タイトルがいくつかある。

「毬の行方」（昭和5年4月10日条）：1930年公開。沢田順介監督。無声映画。

「春はまた丘へ」（昭和5年11月13日条）：1929年公開。長倉祐孝監督。日活（太秦撮影所）

「国難」（昭和7年5月5日条）：1920年公開。元寇をテーマにした作品。

「オリンピック映画」：第10回オリンピックロサンゼルス大会の記録映画『進めオリンピック』を鑑賞したと思われる。

「童話ジャックと豆の木」（昭和9年3月1日条）：1941年製作。新井和五郎による影絵アニメ。15分、白黒映画。

「漫画お猿の大漁」（昭和10年1月16日条）：1933年製作。田村安司作画。漫画映画。10分。

44) 前掲注42) 著、pp.47・48。

「漫画海ノ冒険」(昭和10年3月1日条):不明。

「銀嶺ニ輝ク」(昭和10年3月1日条):不明。

「漫画お月様ト蛙」(昭和11年3月2日条):1936年製作。宮下萬三作画。10分、白黒アニメ。

このように昭和初期の二葉尋常小学校低学年の児童には、アニメ映画などを選定して鑑賞させている。そういった情操教育を重視した映画鑑賞がしだいにプロパガンダ色が強い映画を見せるように変化していく。

「観艦式」(昭和5年11月13日条):「教育映画連盟映写会開催」とある。内容の詳細は不明。

「非常時日本」(昭和8年6月30日条):1933年大阪毎日新聞社製作。「皇国」や「皇軍」の用語を定着させた皇道派の重鎮・荒木貞夫陸軍大将が西洋的享楽生活に墮落した日本の現状を叱咤する内容の映画。

「楠公誠忠ノ巻」(昭和10年5月7日条):不明。

「非常ラッパ」(昭和11年3月2日条):不明。

このように次第に当時の世相を反映した国策映画に近いものを児童にも鑑賞させている。

これが1939(昭和14)年になると、国際情勢はヨーロッパで第二次世界戦争が勃発し、満州国国境ではノモンハン事件が起きる。国内でも経済が国家統制の状況下に置かれ、いよいよ戦時色が濃くなっていく。そうした状況のなかで、二葉尋常小学校児童が鑑賞する映画も、このような国策に合致した映画鑑賞をするようになる。

「五人の斥候兵」(昭和14年9月18日条)

1938年製作のいわゆる戦争物。田坂具隆監督、日活多摩川映画製作。日中戦争の北支戦線でのエピソードを描いている⁴⁵⁾。この映画は、「母の会⁴⁶⁾例会」の場で「映画鑑賞会」として上映されたもので、同時に「五、六年児童モ参加」して鑑賞したことが『学校日誌』に記載されている。

同年11月には、日野葦平の『土と兵隊』をもとに田坂具隆が監督した映画「土と兵隊」を、二葉尋常小学校の近く、長田区庄田町4丁目にあった昭和館で鑑賞している。

一、映画鑑賞会、午前八時半ヨリ十一時迄、昭和館ニ於テ映画「土と兵隊」ヲ鑑覧ス(五、六年) (昭和14年11月17日条)

45) 1938年ヴェネツィア国際映画祭でイタリア民衆文化大臣賞を受賞。『キネマ旬報』でも1938年度の日本映画ベスト・ワンに選ばれている。オリジナルフィルムは現存していない。

46) 二葉尋常小学校創設当初から児童の母親の教養を深める目的で二葉後援会のもとで度々開催されていたが、1933(昭和8)年に独立して「二葉母の会」が発足した。毎月18日に例会を開催し講演会・会社見学などを行っている。前掲注42) pp.320-322。昭和11年11月18日にも母の会は「映画「夢の鉄兜」(1937年日活多摩川製作所製作)を鑑賞している。

1941（昭和16）年には、第11回オリンピックベルリン大会の記録映画であり、「春の祭典」と合わせてレニ・リーフェンシュタール監督の「オリンピア」二部作のうち「民族の祭典」⁴⁷⁾を、当時の林田区庄田3丁目にあった日本館で鑑賞している。

一、四・五、六年男児、午前九時ヨリ日本館ニテ、映画「民族ノ祭典」ヲ鑑覧ス、
(5月2日条)

1943（昭和18）年には、海軍省の後援で東映映画が製作した国策映画「ハワイ・マレー沖海戦」を二葉国民学校のすぐ近くにあった松竹館（林田区久保町6丁目）で鑑賞している。

一、三年以上、松竹館ニテ、ハワイ、マレー海戦ノ映画ヲ鑑覧ス、正午ヨリ午後二時
(昭和18年1月12日条)

戦局が悪化した1944（昭和19）年1月には、国策映画『海軍』⁴⁸⁾を観に行っている。

一、映画鑑覧 四年以上 九、〇〇-一、三〇 松竹館「海軍」 (昭和19年1月15日条)

『学校日誌』が記録した児童の映画鑑賞は、この映画『海軍』を観た記事以降、途絶している。その背後に、もはや映画鑑賞のような情操教育を地元の映画館に児童を引率して行うようなゆとりがなくなっていたことが推測される。

5.3 慰問文

1931（昭和6）年9月に惹起した満州事変は約1年を経て収束に至る。その後、日本は満州国建国に深く関わり、以後、多くの日本軍（関東軍）が中国東北部に駐留することになる。そして、1937（昭和12）年の盧溝橋事件以降、日本軍は中国全土で泥沼の戦争状態に入っていく。いわゆる日中戦争である。日中間の戦闘が継続しているなか、1941（昭和16年）12月からは米英との太平洋戦争が勃発する。

こうした日本軍が占領・駐屯した地域（当時は外地と呼称した）に出征している兵士を激励する目的で書かれた手紙・書簡を慰問文という。この慰問文については詳細な研究を見出していない⁴⁹⁾。国会図書館デジタルライブラリーに慰問文文例集などが掲載されており、一ノ瀬俊也によ

47) 1938年にレニ・リーフェンシュタールによって撮影された記録映画。様々な批判を受けた映画であるが、現在では、リーフェンシュタールの撮影技法は高く評価されている。民衆がこの映画をどのように観たのかを考察した論文に、坂上康博「戦時下の映画と国家—『民族の祭典』—」田崎宣義編『近代日本の都市と農村—激動の1910-50年代—』青弓社、2012、所収がある。

48) 太平洋戦争の端緒となる真珠湾攻撃で潜水艇攻撃に参加し戦死した谷真人をモデルにした作品。田坂具隆監督、松竹太秦撮影所、1943年撮影。

49) 本島和人「国民学校児童から出征兵士への慰問文「史料で読む飯田・下伊那の歴史」(3)『飯田市歴史研究所年報』8号、2010。伊藤啓祐「満洲に届いた慰問文」『青森県率郷土館研究紀要』39号、2015.3。ノ

て慰問文文集⁵⁰⁾が集成し刊行されているのが目につくだけである。

そうしたなかで、本稿(上)において紹介した北支派遣磯谷部隊鮎川部隊所属の黒田常夫が満州事変から復員後に手元に大切に残し整理しようとした数多くの慰問文・書簡類や礼状(宛先不明で黒田に返送されたもの)は、当時の慰問文がどのような内容だったかのを考察するうえで貴重な史料となりえると考えている。しかし、紙幅の関係から本稿では分析することができないので、別稿に譲りたい。

本稿で注目したいのは、『学校日誌』の記載のなかに慰問文と学校との関係を示す事例がいくつも出てくる点である。最初に「慰問文」のことが書かれた記述は、1932(昭和7)年度『学校日誌』からである。

- 一、第二時満洲事変記念行事ノートシテ出征軍人慰問文ヲ全校一斉ニ課シ、優秀ナルモノ約一割ヲ送付スルコトニシタ。(昭和7年9月19日条)

二葉尋常小学校生徒が書いた慰問文は、学校が「全校一斉ニ」慰問文を書くことを「課シ」作文させ、教員がその慰問文に目を通して「優秀ナルモノ約一割」を関係機関に「送付」したと書かれている。どうも、尋常小学校生徒が書いた慰問文は、自発的に生徒が書いた作文ではなかったようである。このように学校側の指示で書かせた慰問文ということがわかる記述は、以降もいくつか散見される。

- 一、本日 満洲出征兵士慰問文並ニ絵画全校徴収セリ、(昭和11年1月24日条)

昭和10年度の在籍児童数は男女合わせて2,755名⁵¹⁾である。この「全校」児童が書いた慰問文・絵画のうち、「各二五〇枚」が「市役所」に送付されている(1月25日条)。このように慰問文は学校が児童に書かせた(いってみれば、強制した)ものであることをうかがわせる記述は以降も出てくる。

- ・一、支那事変出征、陸海軍将士ニ慰問状發送ノ為、用紙ヲ各学級ニ配布ス、(昭和14年5月8日条)
- ・駒ヶ林在郷軍人会ヨリノ慰問状用紙ヲ各学級ニ配布ス(昭和14年9月7日条)
- ・各学級ニテソノ学級ノ父兄ニシテ出征セル軍人ニ慰問状ヲ發送ス、(昭和14年10月7日条)

ㄨ 松本篤「言葉はどこまで届くのかー80年前の子どもたちの慰問文集を再々発行するー(闘う・戦う:子どもたちに平和を)ー(文化と運動の新しい道を求めて)ー」『子どもの文化』52巻7号、2020.7などが散見されるが、いずれも慰問文の紹介を主たる目的としたものである。

50) 一ノ瀬俊也編『近代日本軍隊教育・生活マニュアル資料集成(昭和編 第6巻)前線への慰問文・式辞挨拶のために 1』柏書房、2010。

51) 前掲注42)、p.134。

・慰問状ヲ二年以上全部、一年生各学級二十ツ、記述セシム、 (昭和15年2月7日条)

以降も「慰問文発送」の記事は散見されるが、学校がどのように関わったかは不明である。昭和16年度『学校日誌』では、5月、6月、7月、10月、12月、翌1月、2月、3月とほぼ7日に定期的に「慰問文発送」を行っている⁵²⁾。この傾向は、昭和17年度『学校日誌』でも確認できる。このような各月7日に「慰問状発送」を行った記述は、昭和18年度『学校日誌』10月6日の「出征兵慰問文ノ作製」という記述を最後に見出されなくなる。戦況の悪化と物資（慰問文用紙など）の不足から学校が学校行事として児童に慰問文を書かせることはできなくなったのではないかと推測している。

5.4 献納・回収・食糧難・勤労奉仕

「献納」の記載がみえるのは、1933（昭和8）年度の『学校日誌』が最初である。

一、大倉山ニテ防空献納式行ハル (昭和8年7月23日条)

大倉喜八郎が買い取り別邸を建てた土地を神戸市に寄贈したため「大倉山」と呼ばれるようになった。この神戸市中央区の「大倉山」において、防空兵器献納式が行われたことを書き留めた記述である。どのような兵器を献納したのかは詳らかでない。

次に「献納」の記事が掲載されているのは、1935（昭和10）年1月の記載である。

一、朝会 大日本飛行機少年団主催ニ係ル海軍機「報国児童号」⁵³⁾ニ関スル件通告、 (昭和10年1月17日条)

1932（昭和7）年に設立された大日本飛行機少年団は、「皇国空軍充実ノ急務ヲ高唱シ第二国民タル全国青少年ヲ動員シテ航空愛国ノ精神ヲ養ヒ進ンデ航空発展ニ奉仕スル」（「第日本飛行少年団々則」第三条）目的で設立され、東京に本部を置き全国に支部を置いた。「学校団員」として「三十名以上ノ希望者ヲ以テ組織」された。団員は「団費年額一名五十銭ヲ納入」（同団則、第五条）しなければならなかった。1935（昭和10）年末には、「制空鉛筆の売上益金、銀紙、空チューブの蒐集等によって」「一万九千七百三十四円七十八銭」を集め、9月に「報国第八十四号第一児童号」を海軍に献納している。二葉尋常小学校にも大日本飛行機少年団団員が30名以上おり、校長が「朝会」において、本年中に「報国第八十四号第一児童号」の献納計画が進んでいることを

52) 前掲注42) 著、「主要行事一覧」のなかで、「月行事」として、「七日 出征将士慰問状発送」とあり、1939（昭和14）年当時には学校行事として恒例化していたことがわかる。

53) この時献納した飛行機は、「海軍九〇式艦上戦闘機」であった。野溝光編『大日本飛行機少年団拾年史』野溝光、1941。pp.28, 44-46 に詳しい。国会図書館デジタルアーカイブで閲覧できる。ちなみにネット上に掲出されている「陸軍愛国号献納機調査報告 付録」http://www.ne.jp/asahi/aikokuki/aikokuki-top/Houkokugou_List1.html を検索したが、「報国児童号」は掲載されていない。

「通告」した記事のようである。

「報国第八十四号第一児童号」が献納された直後の1935（昭和10）年9月23日には、「飛行器献納ニツキ、児童一銭宛、職員十銭宛」徴収することが「職員朝会」で通知がなされている。「献納」のために、児童も教員もいわば強制的に献金している。

途中、『学校日誌』が途絶しているため、その後の「献納」に関してどのような記載があったのかは不明である。残存する尋常小学校期の最後の『学校日誌』である1939（昭和14）年度の『学校日誌』には、「軍用犬献納」や「軍馬献納」の記事が見いだされる。

- ・一、軍用犬献納金ヲ教員会へ送付ス、（昭和14年4月28日条）
- ・一、逡伝、学務課発、
軍馬献納式当日ハ一校十名ノ児童ニ教員一名付添ヒ午後一時三十分迄ニ神戸校ニ集合セシメラレタシ（昭和14年9月30日条）
- ・一、軍馬献納式、於神戸校午後二時、今井校長、児童代表、六年男女各五名、金塚訓導引率参列ス（昭和14年10月2日条）

国民学校期の『学校日誌』には、このような「献納」に関する記述はまったく出てこない。その代わり様々な品物を「回収」（『学校日誌』の記載上は「供出」という用語は使用していない）記事が頻発するようになる。

- 一、鉄類献納ニ付、二宮先生銅像ニ訣別ノ式ヲ行フ、（昭和17年1月22日条）

この記事にある「二宮先生銅像」とは、1929（昭和4）年10月に二葉尋常小学校に寄贈された二宮尊徳像のことである。二葉尋常小学校創設直後の昭和4年度『学校日誌』に寄贈の経緯が書かれている。

- 一、二宮尊徳銅像地鎮祭ヲ第一時ニ挙行、斎主駒ヶ林神社神主、参列者、寄付者中村直吉氏、五、六学年児童及関係職員（昭和4年10月21日条）
- 一、二宮尊徳銅像台座石工事完成（昭和4年11月6日条）
- 一、中村直吉氏寄贈二宮尊徳銅像備付終ル、（昭和4年11月22日条）
- 一、二宮尊徳小冊子二一〇〇部中村直吉氏ヨリ受取ル、（昭和4年12月19日条）
- 一、朝会ノ際、二宮金次郎先生銅像除幕式ヲ行フ、
 1. 生徒総代除幕、2. 中村氏挨拶、3. 浅野氏祝辞、4. 校長謝辞（昭和4年12月21日条）

兵庫県県会議員・神戸取引所常務理事を歴任した中村直吉⁵⁴)は、ブラジルへ移民として神戸港から出港する人々を激励するなど社会事業にも貢献した人物である。1928（昭和3）年から次年度に

かけて神戸、明石の小学校に二宮尊徳の銅像を寄贈した。その1体が二葉尋常小学校にももたらされた時の記事になる。同時に、彼が出版した『二宮尊徳先生小伝』⁵⁵⁾(中村個人の自費出版、1928年)を二葉尋常小学校全児童宛てに2,100⁵⁶⁾部寄贈している。この銅像は校舎正面植樹園内に設置された⁵⁷⁾。

この銅像が、1942(昭和17)年1月に金属供出の一部として供出されたわけである。翌日の記載には、学校内のほとんどすべての金属品が供出されたことがわかる。

- 一、金属回収ニツキ、ストーブ、鉄柵、鉄火鉢、二宮尊徳像、鉄瓶、溝蓋等献納ス、
(昭和17年1月23日条)

この時期の『学校日誌』の記述からみると、地域の金属という金属はほとんど根こそぎ供出されたことがわかる。

- ・一、駒ヶ林地区金属回収ノ為校庭ノ一部ヲ使用ス、 (昭和17年3月16日条)
- ・一、金属回収ニ校庭ヲ使用ス (昭和17年3月22日条)
- ・一、薬瓶蒐集ヲナス(二十日、二十一日)、 (昭和17年10月20日条)
- ・一、本日東、西、南、並各門ノ鉄扉取外シヲナス(献納ノ為) (昭和17年11月17日条)
- ・一、駒ヶ林地区金属回収ノ為校庭一部使用 (昭和17年11月24日条)
- ・一、空瓶ノ蒐集ヲナス (昭和17年11月28日条)
- ・一、空瓶蒐集ヲナス(十八・十九日)、 (昭和17年12月18日条)
- ・一、運動場使用、金属回収、区役所、 (昭和18年8月10日条)
- ・一、回収物件打合せ出席ノ為高橋・生田訓導 林田警察へ午後一時ヨリ
(昭和18年9月1日条)
- ・一、空瓶蒐集ヲナス(今、明、両日) (昭和19年1月20日条)
- ・一、町会ノ金属回収ニ校庭ヲ使用ス、 (昭和19年2月24日条)
- ・一、金属釦回収 (昭和19年6月12日条)

※同年6月10日に「代用釦」を区役所から受け取っている。6月13日・14日の両日も金

54) 中村直吉(1880「明治13」年生まれ-1939「昭和14」年没)は、兵庫県議会議員などを歴任し、少年の健全育成に尽力し、神戸や明石の小学校などに銅像を寄進した。その一体が二葉尋常小学校にも寄進された記録である。神戸新聞通信社『兵庫県人名鑑』神戸新聞通信社、1936、pp.121・122。桂泰三「中村直吉」神戸新聞出版センター編『兵庫県百科事典』神戸新聞出版センター、1983、p.355。上垣正明「旧有馬郡・旧美囊郡東部域の二宮金次郎像(上・下)『歴史と神戸』335号、2019.8。336号、2019.9にも言及がある。

55) 詳細は不明。籠谷次郎「二宮金次郎像と楠正成・正行像-大阪府小学校における設置状況の考察-」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所)58号、1997.2の注27に言及がある(p.26)。

56) 1929(昭和4)年創設時の二葉尋常小学校全児童数は、男女合わせて2,073名(前掲注42、p.130)であった。中村は全児童数に合わせた冊数を寄贈している。

57) 前掲注42)、p.261。

属釦を回収している。

上記の「金属釦」の回収記事を最後に、国民学校期の『学校日誌』には「金属回収」の記載はみえなくなる。鉄製品、銅製品、薬瓶、空瓶、はては金属製のボタンまで供出・回収している。ほぼ地域には金属製品は残っていない状況になったと考えられる。いかに工業製品の原材料に困窮していたかが推測される。

また、金属製品以外にもさまざまな製品の製造に支障をきたす事態に立ち入っていたことは、以下の記述からもわかる。

一、不用品蒐集、 (昭和 14 年 4 月 27 日条)

「不用品蒐集」について、『二葉教育十年史』の「訓育方針」の節で次のように書いている。

廃品の蒐集 毎月二十七日に古新聞一日分及び古金、銀紙等の廃品を持参せしめ、之を売却し、一面資源愛護の国策に協力せしめると共に、他面利用厚生を精神を涵養する。尚校内に於いても毎日の塵芥を紙屑、金属類、ガラス類、布類等に区別して捨てさせ、それをまとめて売却し献金す。昭和十三年一ケ年分の売却総額一百十三円二十七銭であった。⁵⁸⁾

以降、連日のように「不用品蒐集」の記載が出てくる。1929（昭和 14）年度『学校日誌』には、計 6 回、1931（昭和 16）年度『学校日誌』には、計 8 回、1932 年（昭和 17）年度『学校日誌』には、2 回出てくる。1943（昭和 18）年度『学校日誌』に 1 回記載が見いだせる。以降はこのような「不用品蒐集」という記載は出てこなくなる。

一方、より具体的に物品名を明示して「蒐集」を行ったという記載がある。

- ・一、古新聞紙取集、 (昭和 15 年 1 月 27 日条)
- ・一、古釘蒐集ヲ行フ、 (昭和 16 年 7 月 16 日条)
- ・一、午後一時ヨリ作法室ニ於テ母の会幹部会ヲ開キ茶殻蒐集ノ件ニツキ協議ヲナス、
(昭和 16 年 12 月 13 日条)
- ・一、九時三十分少年団児童役員ヲ講堂ニ集メ茶殻蒐集ノ件ニツキ指示
(昭和 17 年 1 月 6 日条)
- ・一、茶殻蒐集ヲナス、 (昭和 17 年 2 月 3 日条)
- ・一、古教科書授受準備、 (昭和 19 年 3 月 22 日条)
- ・一、古教科書提出
一、教室内教具類整理返還 (昭和 19 年 3 月 23 日条)

58) 前掲 42)、p.244。

- ・一、諸帳簿提出 (昭和 19 年 3 月 24 日条)
- ・一、綿ボロ菟集ノタメ婦人会員区役所吏員多数来校、 (昭和 19 年 10 月 22 日条)
- ・一、古紙回収 (昭和 20 年 1 月 29 日条)

これらの記載のうち、「茶殻菟集」とあるのは、「茶殻」を米に混ぜて増量して炊くためである。太平洋戦争期には食糧難から配給制が実施され十分な食糧支給がなされなくなる。そうしたなかで、貴重な米をご飯として炊く際に茶殻を混ぜて増量する方法が編み出された⁵⁹⁾。そのための「茶殻菟集」であった。

また、用紙不足から雑誌なども次々と廃刊に追い込まれ、新聞も頁数が次第に少なくなっていく、最後は見開き 4 頁立てになってしまう。

このように『学校日誌』の短い記載からも、次第に戦争継続に喘ぐ状況や生活が逼迫していく様子をうかがうことができる。このような状況を、国民学校期の『学校日誌』における給食に関連した記事に着目して検討してみたい。最も早く給食と関連するであろう記事は、1942 (昭和 17) 年度『学校日誌』から記載がある。

- 一、うどんノ切符、三、四年児童に配布ス、 (昭和 17 年 7 月 7 日条)

家庭における食糧事情の悪化をうかがわせる記述と考えている。

- ・一、味付パン五年以下全児童ニ配給ス (昭和 18 年 3 月 18 日条)
- ・一、パン配給ヲナス、五年以下全児童ニ味付パン三個ヅ、本日分第二回配給ヲ行ヒ、本日ノ昼食トス (昭和 18 年 3 月 23 日条)

二葉国民学校が、当時のどのような給食を提供していたのか定かではない。また、どのような給食施設が設けられていたのかも不詳である。『二葉教育十年史』掲載の「附 分掌事務規程」の「学籍部」の事務として「補給」として「給食弁当受渡」がある⁶⁰⁾。同じく「家庭の状況」のなかで、「補給児童調」と称する表があり、「補給児童」欄の「給食児童」として「11 名」とある⁶¹⁾。本来、児童は自宅から弁当を持参する決まりであったが、家庭の事情を考慮して一部児童に「給食」「補給」として「弁当」を提供していたようである。

59) 日中戦争から太平洋戦争と続くなかで十分な食糧を得ることができなくなっていく。当然に、日常生活も大きく様変わりしていった。仁科又亮「戦中・戦後を通じて暮らしの移り変わり」『昭和の暮らし研究』1 号、2002. 2 や、辻井麻伽「戦時下における遊びと食事－太平洋戦争中の人々の暮らし－」『皇学館論叢』53 卷 3 号、2020. 10 に詳しい。茶殻を食用として再利用することは、斎藤美奈子『戦下のレシピー太平洋戦争下の食を知る－』岩波現代文庫、2015、pp.134・135 で紹介している。

60) 前掲注 42) p.270。

61) 前掲注 42) p.177。「授業料免除及補給児童調」(1938 年度調査)によると、全児童数、2,236 名のうち、授業料免除児童 227 名 (貧困 110 名、軍事 117 名)、補給児童 (学用品通学服給与児童 86 名「貧困 66 名、軍事 20 名」、給食児童 11 名 (すべて貧困)、とある。

1943（昭和18）年になると9月以降度々「パン配給」が行われている。その他、「空豆配給」（11月4日条）や「芋配給（甘藷）」（11月5日条）なども行われている。3月になると、「味噌汁配給」が度々登場する。「砂糖湯」も「給与」されている（昭和19年3月10日条、同年3月13・14日条）。断続的に「パン給食」の記載が続くが、1944（昭和19）年6月17日の「正午児童招集パン配給」以降は「パン配給」の記載はなくなる⁶²⁾。敗戦までに「配給」として記載された記事は、

一、全児童へチリ紙配給 午後、 (昭和19年8月28日条)

であり、生活用品としての「チリ紙」まで「配給」しなければいけないほど物資が逼迫していたことを物語っている。

そうしたなか、1944（昭和19）年5月には、児童が近郊に出かけて「蓬」採集に出かけている。

- ・一、蓬採集 三年 妙法寺 落合山 二年 天上川 一年 妙法寺川河岸 (昭和19年5月9日条)
- ・一、蓬採 四、五年 妙法寺 (昭和19年5月19日条)
- ・一、食用草採集会 七.三〇-三.〇〇 高久 (昭和19年5月28日条)

学校児童がこぞって食用にできる野草（蓬など）を採集に出かけている⁶³⁾。

こうした学校給食への対応について、『神戸市教育史 第二集』では、1944（昭和19）年3月に開催された校長会での給食に関する協議内容が記載されている。そのなかで主食の供与以外に副食については次のように決まった。

副食の野菜は、当局からも配給するが、原則として自給菜園によってまかなうよう努力する⁶⁴⁾

そして、実施方法や実施要領が決まったとある。昭和18年度の二葉国民学校『学校日誌』では、「自給菜園」に対する対応の状況を物語る記述が出てくる。

- ・一、校庭農園打合会 一.〇〇 大黒校 東谷 (昭和19年3月8日条)
- ・一、蓮池野球場⁶⁵⁾菜園化打合会 九.〇〇 蓮池校 弓岡 (昭和19年3月15日条)

62) 神戸市における学校給食に関しては、神戸市教育史編集委員会編『神戸市教育史 第二集』神戸市教育史刊行委員会、1964、pp.40-44 に記述があるが、概略が書かれているだけで具体的な給食状況についての言及は少ない。

63) 前掲注59) 斎藤著では、ヨモギの利用法として「あく抜きしておひたし、和え物、雑炊の実に」とある。p.13。

64) 前掲注62) p.42。

65) この蓮池野球場とは、神戸市民運動場にあった野球場のことである。1928年昭和天皇即位記念行事の一環として建設された。2000年に閉鎖され跡地は西代蓮池公園となっている。神戸市教育委員会社会教 〆

- ・一、全職員出勤 校庭菜園化作業 (昭和19年3月30日条)

野球場のグラウンドは「農園」として「自給菜園」用地となり、「肥桶埋設」(昭和19年7月3日条)をするなど耕作に余念がない。その日は教員が明石まで「甘藷苗受領」のために出向いている。果ては児童60名を「勤労作業」に動員して「蓮池」農園の耕作を行っている(昭和19年7月14日条)。11月になるとわざわざ兵庫県西部の上郡まで野菜苗を購入するために教員が出かけている。そして、「六年男児」といっしょに校庭と「蓮池農園」に植え付けを行っている。

- ・一、東谷、蓑田訓導 農園ノ栽培野菜購入ノタメ上郡へ出張、 (昭和19年11月15日条)
- ・一、校庭ノ一部及蓮池農園ノ水菜移植 (昭和19年11月17日条)

しかし、この記述を最後に、「校庭農園」や「蓮池農園」での「勤労奉仕」をした記述はなくなる。昭和20年度『学校日誌』には、まったく出てこない。

6. 神戸空襲と学校

二葉尋常小学校『学校日誌』に「防空」の用語が登場するのは、1932(昭和7)年7月17日の記事が最初である。

- 一、防空演習(神戸市)アリ、当校ハ林田区防護団二葉分団本部ニテ、午後一時救護作業班編成 校長ヨリ訓示後解散。 (昭和7年7月17日条)

この記事は、神戸市主催の防空演習⁶⁶⁾が実施され、二葉尋常小学校は林田区の防護団⁶⁷⁾二葉分団の本部として「救護作業班」を編成して訓練を実施したことを記録した内容になっている。1934(昭和9)年7月にも「防護団演習」を実施している(7月25日から28日)。翌年4月には、防護団用に「防毒衣」が入った戸棚などが整備されている。

- 一、防護団用防毒衣入戸棚式個並ニ衣服廿三個 林田区防護団本部ヨリ送ラレ取取エズ倉庫ニ置ク、 (昭和10年4月12日条)

ㄨ 育部神戸市民運動場が発行した小冊子(1979年発行)によると、「第二次世界大戦勃発とともに、運動競技は衰微の一途をたどり、戦争末期には、競技場は芋畑と化しました。」と書かれている。二葉国民学校『学校日誌』では、その後、度々、「蓮池農園」として出てくる。

66) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土防衛作戦』朝霞新聞社、1968、pp.21・22に掲載する「主要防空演習実施一覧表」には、神戸市が実施した防空演習は収載されていない。

67) 防護団は、関東大震災後の1932(昭和7)年に東京市において結成が開始され、地域ごとに編成された民間の防災団体であった。次第に陸軍の統制下で防空活動をするようになる。1939(昭和14)年に従来あった消防組に吸収統合され、新たに警防団が設けられた。土田宏成『近代日本の「国民防空」体制』神田外語大学出版局、2010に詳しい。

これらの「防毒衣」が有効に活用されたのかどうかは定かではない。10月に入ると、「灯火管制」を「児童ヲ通ジテ各戸へ徹底」させるよう職員朝会において校長から説明がなされている（10月11日条）。灯火管制を含む「防護演習」は、「累々空襲警報」や「警戒警報」を発しながら13日まで続けられた。

残念ながら二葉尋常小学校『学校日誌』は、昭和11年度から昭和13年度の3冊が欠逸しているため、その後の防空演習の様子を知ることはできない。この3年間も、断続的に「防空訓練」が実施されたことは、想像に難くない。そして、単なる「防空訓練」から敵の空襲を想定した訓練に変貌していったようである。1939（昭和14）年度の二葉尋常小学校『学校日誌』の中にも、「防空演習」のことが記されている（7月17日条から20日条）。ここでは、防護団を解消させて新たに作られた「警護団」が「防空演習」の主体になっている。

午前十時四十分敵機ノ投下弾ニヨリ南ノ露台一部破壊サレタリト想定シ三階教室ノ六年ハ駒ヶ林神社ニ避難演習ヲ行フ、
（昭和14年7月19日条）

敵機による爆弾投下を想定しての演習、それに伴う児童の「避難演習」も行われており、児童もまきこんだ「防空演習」だったことがわかる。

1940（昭和15）年度の二葉尋常小学校『学校日誌』は欠逸しており、昭和15年度の「防空」にたいする対応はわからない。次年度、二葉尋常小学校は二葉国民学校に教育制度が変わる。1941（昭和16）年度からの二葉国民学校『学校日誌』では、単に空襲を想定した「演習」から、空襲による被害に対応した措置を学校においても行っていることがわかる。それらを列記すると次のようになる。

- ・補強資材（木材）三百本 本校用トシテ市ヨリ搬入ス
（昭和16年6月5日条）
- ・一、第四時非常時訓練ヲ行フ、
全員校庭ニ避難、小型ポンプ演習ヲ行フ、
（昭和16年7月5日条）
- ・一、防空用黒幕ノ取付準備ヲナス
（昭和16年12月8日条）
- ・一、午後三時ヨリ教務打合会ヲ開キ空襲時ノ児童避難、職員勤務等ニツキ打合ヲ行フ
（昭和16年12月12日条）

12月15日には「空襲時避難訓練」を実施している。そして、12月29日には、「防空救護資材」が到着した記事を記載している。防空による安全確保から、空襲を受けた際の避難とそれに伴う人的被害も想定せざるを得ない状況になってきたことが推測される。

1942（昭和17）年になると、防空訓練は切迫の度を増し避難訓練も度々実施されている。

- 一、第四時授業中、午前十一時三十分、非常ベルヲ鳴ラシ二階、三階ノ児童ノ一階ヘノ避難訓練ヲ行ヒ引続キ校庭ヘノ集合訓練ヲ行フ、成績佳良
（昭和17年4月22日条）

以降、二葉国民学校では様々な空襲被害を想定した措置が取られている。「各教室ニ砂袋ヲ装置」（4月27日条、同様の記載が12月7日条にもある）するなど、連日、教職員や児童も「勤労奉仕作業」として「防空資材」を校舎内に配置する作業を行っている（9月4日条、9月28日条、10月5日条、12月8日条など）。12月20日になると、「防毒マスク」の配備も行われた。

一、防毒マスク、二十六箱、配達受納、(町内、警防団用) (昭和17年12月20日条)

1943（昭和18年）度『学校日誌』は、連日、「警戒警報」を伴う「防空訓練」が実施されている。ほとんど授業などは放棄して「防空訓練」に明け暮れる日々が続いている。

・一、窓ノ防空板ニ目印入実施、 (昭和18年9月1日条)

・一、防空窓ノ設備検査ノタメ区役所吏員及請負大工来校、 (昭和18年9月17日条)

「防空窓」とはどのような状態に整備したものか不明であるが、単に和紙を罰点に張り付けたものではないことが想定できる。その間にも度々防空用の「三角巾使用指導」（6月5日条、10月5日条）も行われている。そして、校舎の壁面に「防空迷彩」も施している。

・一、防空迷彩施シ始ム (昭和19年1月27日条)

3日にわたって校舎壁面へ施された「防空迷彩」がどのようなものであったのか、写真などが残されていないので不明であるが、1934（昭和9）年に都市偽装調査を実施した田辺平学らの講演記録が残されている⁶⁸⁾。大阪市内のビルや都市の重要なインフラ施設に対して迷彩塗装を施した成果について検証を行った評価記録である。都市機能を空襲から防御するために様々な偽装が行われていることがわかる。しかし、実際のアメリカ軍による空襲に際してどれくらいの効果があったのかは不明である。

1944（昭和19）年になると、学校内に「待避所」が整備されていく。当初は、陸軍が指導にあたり林田区や須磨区の「各学校」が受講して整備が始まる。

・一、待避所設営指導 指導 軍 受講 林田須磨区学校 (昭和19年3月14日条)

・一、待避所指導 九.〇〇-四.〇〇 軍隊 六十名 (昭和19年3月15日条)

・一、全職員出勤日 待避所整^マ美 (昭和19年3月26日条)

6月になると、「煉瓦」（6月7日条）や「石」（6月8日条）・「土」（6月9日条）などを屋上に「児童勤労奉仕」で運び上げている。9月には、約1カ月かけて「校庭貯水池」を兵庫尋常高等小

68) 田辺平学・笠間一夫・新海悟郎「近畿防空演習に見たる偽装の諸形態」『建築雑誌』600号、1935.6。

学校の児童の協力のもと作り上げて「満水」にした。消火用の「貯水池」を校庭に作ったと考えられる。

・一、待ヒ所掩蓋用材運搬 (昭和19年9月27日条)

校庭に設営した「待避所」は校庭を掘り穿って穴を掘り、上部に「掩蓋」を用材を使って掛け渡す構造だったと思われる。12月29日にやっと「待避所完成」をみている。

以上のように「防空訓練」・「防空演習」を度々実施し、空襲も想定した防御用の施設や工事などを延々と行っている。ただし、このような防空準備がどれだけ効果を発揮する措置だったかは心許無いものがある。

1945（昭和20）年1月19日に、アメリカ軍が川崎航空機明石工場を標的にし明石を爆撃しているが、『学校日誌』には「警戒空襲警報」の発令と「解除」の記載しかない。2月4日には川崎、三菱造船所が空襲を受けている。二葉国民学校『学校日誌』には、下記の1行が書かれている。

一、大空襲 八五機 1.30-3.30 (昭和20年2月4日条)

それに対して、3月17日の「大空襲」については、詳細な記述がある。

本日午前二時頃ヨリ B 29 六〇機ノ大空襲アリ

本校関係被害

全焼 駒一、三〇軒 半焼 三戸

駒二 五戸

右児童 一八名

全焼職員家屋 池口、平井、浦田、藤原、平、荻原、井上、弓岡、林崎 向井使丁

本校避難民収容、傷病者収容 物資配給所トナル、 (昭和20年3月17日条)

3月23日には「罹災者事務打合」が隣接する真陽国民学校で行われ、5名の訓導が出席している。翌24日には、14名の訓導による「罹災民調査」が「一日中」行われている。

この3月17日の「大空襲」について、洲脇一郎は、

来襲時間は2時27分～5時00分。B 29は70機。焼夷弾約2万5千個。150屯爆弾若干個。人的被害は、死者2,669名、重傷926名、軽傷10,363名。罹災者242,468名。物的被害は、工場の全焼11、半焼92、民家の全壊67戸、半壊11戸、全焼68,650戸、半焼575戸。

と、書いている⁶⁹⁾。

次に神戸を襲った「大空襲」は、6月5日であった。

- 一、午前七時より大空襲 被害各地ニアリ、
 本校下軽微ナルモ全半壊合セテ約二〇〇戸 死傷者五十名余、
- 一、罹災者収容所トナル、
 兵藤訓導及三息女 爆死（この1行、抹消棒線あり）
 枇杷田訓導ノ二弟 爆死
 難波枇杷田香月古家使丁ノ家全焼

3月17日及び6月5日の記載は、洲脇一郎も引用し、特に、6月5日の記載について、「二葉校の被災職員のうち、兵藤訓導は1年生の担任であった。枇杷田訓導、香月訓導は集団疎開の付添で鳥取県八頭郡に行っており難を免れた。難波訓導は2年の主任で長田区海運通で被災した。また山田訓導の家も半焼した」と説明している⁷⁰⁾。

6月9日の記事で、兵藤訓導一家が明石空襲でなくなった記事がある。

- 一、兵藤訓導御一家午前十時頃ノ明石爆撃ノ際爆死サレタル訃報ニ接ス、
 先生及三息女
 山田難波家半壊、 (昭和20年6月9日条)

この神戸空襲に関しては、神戸空襲を記録する会などによって、空襲の記憶を手記として蒐集する作業が行われている。従来注目されなかった資料に、上田浅一が書いた日記がある。上田浅一は、当時葺合北部警防団副団長であり、戦後は神戸愛山協会会長、兵庫県山岳連盟常務理事などを歴任し、日々の日記をつけていた人物である。神戸史学会の落合重信の主導のもとで、この上田浅一日記の昭和20年1年間の記録が活字化されている⁷¹⁾。

上田浅一は3月17日の日記に以下のように綴っている。

午前一時五十分警戒警報発令。遠江灘へ大編隊、紀州沖にも数編隊接近の報あり。(中略) 二時五分空襲警報発令。相次いで来襲せる敵機は兵庫方面より焼夷弾を投下。頭上に迫った一機は山一帯に焼夷弾をばら撒き一面火の海と化す。市内各所より炎々たる猛煙上り爆音と殷々たる砲声は天地を揺がすばかり。火の玉となって撃墜された敵機には歓声をあげた。二機又三機相次いで来襲。海岸通一体、北野方面、瓦斯会社四、護国神社前附近、青谷町四丁目等盛に猛焰を上げ布引、川崎裏山又火の海と化す。爆撃三時間に亘り五時十二分空襲、同二十二分警戒警報が解除されたが、全市を包む火焰は赤々と天を焦がして居た。(中略)
 避難者の群が陸続と続く。琴緒町附近より雲井、日暮、中道より磯上へかけて一面の焼野原と

69) 洲脇一郎「神戸空襲－米国戦略爆撃調査団による分析－」同著『空襲・疎開・動員－戦時・戦後の神戸の社会と教育－』みるめ書房、2018、p.97。

70) 洲脇一郎「1945年5月11日の神戸空襲と学校」でも二葉国民学校『学校日誌』の記載を引用している。前掲69)、pp.124・125、127・128。

71) 『空襲と終戦直後の記録－上田浅一 昭和20年日記－』神戸史学会、落合重信発行、1963。

化し尚も余燼が紅燐の焔うあげていた。

上田の目を通した3月17日の空襲の記録である。そして、「山火事は夕方漸く鎮火。湊川神社の炎上は遺憾此上なく大倉山附近より多聞通、福原、新開地、兵庫鍛冶屋町一帯は広大なる焼野原と化し、県庁、本署、市庁、裁判所も全焼したと聞く。」と続けている。

6月5日の神戸大空襲については、次のように綴っている。

七時半我が上空に最初の二十機来襲すると見るや轟音たる音響と共に市内各所に猛煙上りラジオははつたり止んで水道断水。続いて二十機、三十機と来襲毎に天地を揺する爆音と運動場も樹々の梢も一面火の海と化し猛炎は天を覆つて凄惨なる修羅の巷となり火焰物凄く旋風が渦巻く。(中略)十時半空襲警報、同十一時頃警戒警報も解除されたが猛焰は何時治まるとも見えず(中略)葺合を中心に全市に亘る余りの変り様に茫然たらざるを得なかった。(中略)管内は到る所累々たる死体転がり電車の残骸等目も当てられず(後略)

人的被害の有様を上田は次の日の日記にも、「生田前附近は死屍累々」と書き、多数の罹災者が犠牲にあったことを記録している。

二葉国民学校『学校日誌』は、6月9日以降、ほとんど記載がなくなっていく。そして、8月15日には、以下のように書いている。

正午 陛下 御詔書煥発アラセラル 大東亜戦争終結御聖断
内閣告知、

(昭和20年8月15日条)

昭和20年度の『学校日誌』は、11月22日までが1冊として閉じられている。ほとんど記述がない日が続き、集団疎開関係の記事が断片的に記録されているのが目に付く程度になる。まるで茫然自失した日本を体現したかのような空白のページが続いている。

7. 敗戦後の二葉国民学校

国民学校制度は、敗戦後も存続した。1947(昭和22)年に制定される学校教育法によって新制小中学校が発足する。それまでの約2年間、国民学校制度が続くことになる。この時期の二葉国民学校『学校日誌』は何を記録しているのかをみていく。

戦後の学校・教師そして教育制度の変貌については、既に洲脇一郎が「教師たちの戦後」と題する論考で考察している⁷²⁾。本稿でも洲脇の先行研究を参考にしながら、二葉国民学校の戦後をみることにしたい。

72) 前掲69) 著所収。

1945（昭和20）年度の二葉国民学校『学校日誌』は、2つに分割されて綴じられている。1冊目は、表紙に「昭和二〇年度 学校日誌 神戸市二葉国民学校」と墨書され、4月1日から11月22日までが綴じられている。次の『学校日誌』は、「昭和廿年十一月起廿一年度 学校日誌 神戸市二葉国民学校」と表紙に墨書され、11月24日から始まり翌年度全て及び昭和22年4月3日までが別の1冊として綴じられている。

昭和20年度『学校日誌』第1冊に記載された二葉国民学校は、8月20日から校内の整理を始めている。8月31日になると、「濠整理 防火桶 防火砂 整理」が続く。校庭に作られた貯水池や防火用の桶、防火用の砂などが二葉国民学校内にあった防空設備である。それら今となっては無用の長物となった防空施設を「校内大整理」（10月6日条）する作業をまずは実施している。最後まで残っていた校舎屋上の防空設備の撤去がされたのは翌年昭和21年5月9日・10日であった。

これらの作業は、もはや空襲されることがなくなったために実施した「校内大整理」であり、空襲に備えた様々な防空設備が、今となっては無用の長物となったことを物語っている。

洲脇も指摘しているように、敗戦後も戦前と同様な国家神道行事が学校行事として継続していた。昭和20年から21年にかけて学校行事として国家神道系の行事が軒並み記載されている。「明治節遥拝式」（昭和20年11月3日条）、「紀元節遥拝式」（昭和21年2月11日条）、「春季皇霊祭」（昭和21年3月21日条）、「天長節」（昭和21年4月29日条）、「秋季皇霊祭」（昭和21年9月24日条）、「神嘗祭」（昭和21年10月17日条）、などが恒例行事として記載されている。また、1946（昭和21）年10月10日の記事では、「教育勅語御下賜記念式」が若松国民学校で行われている（昭和20年10月30日条）。このような諸行事は昭和22年度『学校日誌』でも確認できる。

学校教育法は、1947（昭和22）年3月31日に交付され4月1日から施行された。この学校教育法第9条（宗教教育）で「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。」と規定し、戦前の国家神道的諸行事との決別を明記した。

しかし、昭和22年度『学校日誌』を見ると、そう簡単に戦前の学校諸行事、特に国家神道的諸行事から決別できていないことがわかる。

- ・天長節 (昭和22年4月29日条)
- ・明治節 (昭和22年11月3日条)
- ・紀元節 (昭和23年2月11日条)

このような記載が出てこなくなるのは、昭和23年度『学校日誌』以降である。

戦後の二葉国民学校で社会秩序が変わったことを実感できる記述が残されている。

- 神戸市教員組合結成大会於諏訪山国民学校 全職員出席 (昭和21年2月6日条)
- 教員組合経過伝達会 (昭和21年3月9日条)

神戸市において教員組合が結成されたことを伝える記事である⁷³⁾。6月には「教員組合総会」

(昭和21年6月25日条)が開催された記述もある。そして、新制小学校に変わった時期の昭和23年度『学校日誌』には、教職員によるストライキが実施されたことを記録している。

- ・スト準備 (昭和23年5月20日条)
- ・一、兵庫県教職員スト 児童家庭に於て自習 (昭和23年5月21日条)

今まで社会体制に従順に従ってきた学校教職員が自己主張をした嚆矢である。一方、戦前までの記述では一切目に付かなかった記述がある。

- ・村岡花子⁷⁴⁾女史 婦人政治教育講演会 於 講堂 午後 (昭和21年2月15日条)
- ・自由党川西氏講演会
社会党中江氏の演説会 (昭和21年3月17日条)
- ・共産党政見発表 (昭和21年3月31日条)
- ・衆議院議員選挙投票日 一時限後休業 (昭和21年4月10日条)
- ・憲法発布記念式 二葉町七丁目運動会 (昭和21年11月3日条)

以降も、慌ただしく日本の国家・行政秩序の変貌する様を記録している。

- ・知事市長選挙 (昭和22年4月5日条)
- ・衆議院選挙ノ日 (昭和22年4月25日条)
- ・県会市会議員選挙 (昭和22年4月30日条)
- ・憲法実施記念日 (昭和22年5月3日条)
- ・憲法実施祝賀長田区連合体育会 (昭和22年5月5日条)

それまで学校行事を中心に記載していた二葉国民学校『学校日誌』及び新制小学校となった二葉小学校『学校日誌』に、衆議院選挙、知事・市長選挙、政党の演説会や講演会、県会・市会の議員選挙、憲法発布関連記事が記録されている。学校を取り巻く社会環境・社会秩序の大変革の真っ只中に二葉国民学校・二葉小学校があったことを記録した貴重な記述である。

学校教育に関する記述として、「黒塗り教科書」がある。

73) 前掲洲脇著、p.208でも、菊水国民学校や西郷国民学校の『学校日誌』にも同様の記述があること紹介している。

74) カナダの作家L・M・モンゴメリが出版した『*Anne of Green Gables*』1908年刊を『赤毛のアン』として翻訳したことで知られる。戦後は市川房江の勧めで婦選獲得同盟に加わり、婦人参政権獲得運動に協力した。村岡花子「生活を守る婦人の一票」『同盟時報』117号、1952.10。市川房江・村岡花子「十月選挙と婦人の一票」『婦人朝日』7巻10号、1952.10。村岡花子「婦人の社会活動」『家庭科教育』30巻8号、1956.8。などがある。村岡恵理『アンのゆりかご-村岡花子の生涯』マガジンハウス、2008に第9章「『赤毛のアン』ついに刊行」として出版の経緯が語られている。

- ・教科書削除研究会 午後一時ヨリ職員室 (昭和 21 年 2 月 21 日条)
- ・教科書削除教材一斉削除実施 (昭和 21 年 2 月 22 日条)
- ・修身国史地理教科書室内校へ回収 (昭和 21 年 2 月 25 日条)

具体的な教科については書かれていないが、「修身国史地理教科書」と他の教科書の扱いが違っていたことがわかる。つまり国語教科書やその他の教科書などは部分的に「黒塗り」の作業を行い、「修身・国史・地理」の3教科の教科書は林田区では区内の室内国民学校に集約拠出したことがわかる。

文部省は1945（昭和20）年9月20日と1946（昭和21）年1月25日の2回、教科書教材の削除指示を出している。第1回の通牒「終戦二伴フ教科用図書取扱方ニ関スル件」で国民学校国語の削除指示を、第2回の通牒「国民学校後期用図書中ノ削除修正箇所ノ件」で国民学校国語と算数について具体的な指示を出した。他の教科書についての指示は直接には出なかった⁷⁵⁾。二葉国民学校における「教科書削除」作業がどのように行われたのかは不明と言うしかない。昭和21年1月25日の文部省からの指示に従って各府県に移蝶が布達され、兵庫県下の二葉国民学校では約1カ月後に教員間での検討が行われ、翌日には「一斉削除」作業が「実施」されたことがわかる。

一方、修身・国史・地理については、1945（昭和20）年12月31日にG・H・Qの覚書「修身・日本歴史及び地理授業停止に関する件」を受けて、文部省は翌年1月11日授業の即時停止を指示した。

神戸市では1月30日各学校にこの指令が通達され、指示付則の教科書の回収措置に基づいて、東京・大阪・京都とともに該当教科書・教師用参考書を二月中に回収し、冊数・重量を明記して発送することになった。市内各学校では、二月一日にこの旨を児童・生徒に通達し、同二十五日指示どおり回収所に指定された室内小学校へ送付した。⁷⁶⁾

この『神戸市教育史 第二集』の記述に合致するかたちで、二葉国民学校でも室内国民学校への教科書送付を行ったことがわかる。

神戸市内の国民学校初等科85校（一部統廃合して78校）は、1947（昭和22）年4月1日新制小学校に移行することになった。発足初年度の二葉小学校は、全生徒数1,805名、教員数40名、校長今井清のもと、1学年から3学年まで（計18クラス）は二部授業を実施する体制であった⁷⁷⁾。

75) いわゆる「墨ぬり教科書」については、中村紀久二編著『墨ぬり教科書：解題・削除指示資料集』芳文閣出版部、1985。吉田裕久『戦後初期国語教科書史研究－墨ぬり・暫定・国定・検定－』風間書房、2001に詳しい。また、他の教科書、特に歴史教科書については、片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房、1993がある。また、菅修一「墨ぬり教科書（昭和二十一年）の実情について」『花園史学』33号、2011. 11。菅修一「国民学校「初等科国語」五～八の墨ぬり教科書の実情について」『花園大学文学部研究紀要』48号、2016. 3、など墨ぬり教科書を素材にした考察もある。

76) 神戸市教育史編集委員会編『神戸市教育史 第二集』神戸市教育史刊行委員会、1964、p.170。

77) 前掲注76)、p.190。

おわりに

二葉尋常小学校・二葉国民学校・二葉小学校は、2016（平成18）年3月31日をもって77年間の地域教育の拠点としての役割を終える。幸いにも68冊もの『学校日誌』が残存していたことが、本稿において基礎史料として使うことができたわけである。戦後の『学校日誌』についても検討すべき事項が多いが紙幅の関係でごく一部だけ紹介しておきたい。

学校日誌に記載する事項について、一定の規則に則った記載が行われたようではない。当該年度の学校長の意向が色濃く反映していることも推測できる。

例えば、1964（昭和39）年に举行された第18回オリンピック競技東京大会は、敗戦後の復興と国際社会の一員として歩み始めた日本を全国民が実感できたイベントであった。この第18回オリンピック競技大会について、二葉小学校『学校日誌』から捜してみたい。

この時期の二葉小学校学校日誌は、上下2段に所定の事項が書き込みができるようになっている学校日誌用箋（1ページに2日分を記載できる）を使用している。記載すべき事項は、予め、以下のような項目が印刷されている。

（最上部に校長印を押す囲み欄がある）

___月___日（ 曜）天候 _____ 記入者職 _____ 氏名 _____

行 事

職員事項

来 校 者

記 事

（5年保存）

各ページの最下部に「5年保存」と印刷してある用箋に記載するようになっている。B5版サイズを上下2段に分けて2日分を記載するようになっているため、記載する内容は自ずと断片的な項目だけになっている。

「昭和三十九年度／学校日誌／神戸市立二葉小学校」と墨書された白表紙で紐綴じされた1964年度の『学校日誌』のなかで、最初にオリンピック関係の事項が書かれているのは、6月29日の記載である。この日、「オリンピック募金⁷⁸⁾」を行ったことがわかる。これは、生徒から一定額（10円だったようである）を募金として学校が集めた記事である。この「オリンピック募金」の記事は、行事欄に、7月4日、7月6日の計3回見ることができ。生徒はこの「オリンピック募金」

78) 「オリンピック10円募金」は、1961（昭和36）年9月に第1回の募金が開始され、何回か実施された。募金すると記念シールを貰うことができた。4年間実施された「オリンピック募金」では、約2億8,000万円ほどが集まった。昭和館編『日本のオリンピック・パラリンピック—大会を支えた人々—』特別企画展図録，昭和館，2019.3。

をすると、後に記念シールをもらえる仕組みであった。

次にオリンピック関係の記載が見えるのは、9月21日である。

聖火出迎え打合せ会 1.00 井上

(昭和39年9月21日条)

とあり、井上校長が神戸市内を聖火ランナーが走る聖火リレー⁷⁹⁾の打合せのための会合＝「聖火出迎え打合せ会」に出席している。9月24日には、いよいよ「聖火リレー出迎え」が行事欄に書かれている。しかし、翌日9月25日には、台風20号が来襲したため休校になっている。二葉小学校にも「避難民30名」が来校したことが「来校者」欄に書かれている。

10月9日(開会式前日)には、オリンピック趣意書が全生徒に配布されている。そして、10月10日の『学校日誌』には、行事欄及び記事欄に「オリンピック開会式」とある。以降は『学校日誌』にオリンピック関係記事は出てこない。

以上のように簡潔に記載されたオリンピック関係記事は、生徒を対象にした「オリンピック募金」、校長が出席した「聖火出迎え打合せ会」、生徒も動員されたと思われる「聖火リレー出迎え」、オリンピック開会式前日に配布された「オリンピック趣意書」と、生徒が対象の行事であったり、校長の出張という限定的な内容だけが記載されている。そこには、聖火リレーの出迎えが台風のため中止になったことやオリンピック開催期間中の興奮などは一切記載されない。

最後に、阪神・淡路大震災を記録した『学校日誌』に言及しておきたい。

1990年代の神戸市は「神戸市株式会社」と暗に揶揄されるほど発展していた。背後の丘陵地を削ってニュータウンを造成し、交通網として地下鉄を走らせ、削り取った土砂で海岸線を埋め立て新たな造成地を創出していった。1981年に開催された神戸ポートアイランド博覧会は、日本中に神戸市の発展を誇示するイベントであった。その後も順調に国際港湾都市として発展していく。

1995(平成7)年1月17日に発生した兵庫県南部地震は、阪神域に甚大な地震災害を惹起した。特に、東西に長く横たわるような都市構造を持つ神戸市は当時150万人もの人口を擁していた。その神戸市は、この直下型地震によって多くの区が人的・物的にも多大な被害を受けた。

この阪神・淡路大震災では、長田区は地震直後から発生した火災によって多くの家屋が焼失した。1月17日早朝に発生した地震から避難した人々の多くが指定避難所であった公立小学校・公立中学校に殺到した。神戸市長田区は、多くの地域で同時多発的に火災が発生し、広い地域が延焼する事態になった。国道2号線南側に隣接する大正筋商店街は地震発生からしばらく経過した後火災が起り、瞬く間に北から南に延焼していった。この大正筋商店街の西側に近い立地であった二葉小学校にも火の手が迫ったが、からくも類焼を免れた。

この状況を、二葉小学校学校日誌はどのように記載して残しているのか検討していく。

79) 日本国内の聖火リレーコースのうち、第2コースとして、9月9日に宮崎を出発し大分県を経由して四国4県を周り、岡山県から兵庫県・大阪府を周り近畿地方を回った後、岐阜県から東海地方を繋いで最終的に10月8日に東京に到達する計画であった。しかし9月25日に台風20号が来襲したため、走者による聖火リレーを断念し、神戸・大阪間は自動車輸送で繋がれた。大阪市内は予定通り実施された。朝日新聞1964年9月25日大阪朝刊。

1月16日(月)は、成人の日振り替え休日¹で二葉小学校も休校であった。すなわち、1月15日・16日と連休明けの17日午前5時46分に兵庫県南部地震は起こったことになる。1月17日の記載は、指定の記載場所を無視して、次のように書いてある。

行事 休校(臨時)

出勤 M、S、N、O、K、S、校長

教職員 被害の状況と居所

①自宅居住可 校長、教頭、N、Y、M、S、S、O、I、S、S、K、D、T、T、A、T、H

②M(半かい) S(危険のため北区へ) M(全かい北区へ) M(全かい蓮池小へ)

O、K(危険のため避難所へ) N(大阪) H(半かいのため親籍)

兵庫県南部地震発生(午前5時46分)

震度 6~7

学校 校舎本体 被害 軽微 内部設備 かなり損傷 火災なし、

N氏が校舎をあける前に すでに地域住民が校内へはいる

避難所 開設 600人 受け入れ

(個人情報保護の観点から個人名はイニシャルに変更した。筆者注)

地震発生日の緊迫した状況を簡潔に記録している。そこから分かるのは、『学校日誌』への記載は、学校関係の諸事項を書くことが大前提であり、当日は臨時休校をしたこと、出勤できた教員の氏名(上記では個人情報保護の観点からイニシャルに変更している)、教職員の家屋被害状況と所在場所を確認した内容を書いている。その後で、テレビなどで判明した「兵庫県南部地震」といった情報を書き留めている。次いで、学校の被害状況を簡単に記載し、最後に「N氏」(校門などの鍵を保管していた地域の方と思われる)が校門の鍵を開ける前の段階で、しかも教職員が学校に到着する前に、被災した地域住民が学校内に入っていた状況を書いている。そして、「避難所」の「開設」と避難者「600人」を受け入れたとある。

1月17日から27日までの11日間学校は「休校」が続く。発災当日出勤できた教員は26名中7名であった。全教員が出勤したのは21日である。以降も何人もの教員が「職免(職務専念義務免除)」措置が取られている。通勤が出来ないような諸事情を持った教員が何人もいたことがわかる。

『学校日誌』には、被災者関係や避難所関係の記載は非常に少ない。わずかに「救援物資 順調に入荷」(1月19日)、「たきだし(ぶた汁) 平成平和部隊」(1月23日)、「たきだし卵スープ」(1月24日)など、早くからボランティアによる焚き出し支援が行われていたことがわかる記述が残されているだけである。

二葉小学校『学校日誌』の震災関係記述で特徴的な記載は、避難所として学校内に受け入れた避難者人数の記載である。1月17日に「600人受け入れ」と書いている。以降、「約600人」(1月18日)、その後も2月12日まで判で押したように「被災者受け入れ600人」(2月12日)と、避難所に避難している被災者の人数についてまったく同じ記載が続く。発災直後は2,000人以上に膨れ上が

った避難者も漸次減少していくのが他の小学校避難所の状況であることを考えると、1月17日の避難者数の記載を以降踏襲して転記した可能性を窺わせる記載上の特徴である。

1月30日を児童登校日として設定し、1学年から6学年までの登校生徒数が記載してある。それ以前に学校による生徒の安否確認や避難先確認などの作業を行っていることが残存している二葉小学校震災関係資料から知ることができる。しかし、そのような児童の安否確認のためにどのような措置を取ったのかなどは全く書かれていない。『学校日誌』に毎日の状況を俯瞰しながら簡潔にまとめて記載するゆとりもなかったと推測される。

以上、一般的によく知られている出来事のうち、第18回オリンピック競技大会と阪神・淡路大震災について、1964年度及び1994年度の『学校日誌』記載から見てきた。そこから言えることは、『学校日誌』に記載する事項は、あくまで当該学校に関連する事項だけを記載する日誌であり、学校行事・職員の動静、1日に実施した諸事項などを簡潔に記載するものであったことがわかる。教育内容や授業内容に関わる事項などは一切記載していないのも二葉尋常小学校・二葉国民学校・二葉小学校『学校日誌』の特色である。